

Title	京大・図書系・一年目--新人職員による座談会 2002--
Author(s)	
Citation	静脩 (2002), 39(3): 10-14
Issue Date	2002-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/37685">http://hdl.handle.net/2433/37685</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

## 京大・図書系・一年目 新人職員による座談会 2002

2002年10月のある日。附属図書館の一室に、男女5名の若人たちが集まった。4月に新しく採用された、図書系の新人職員たち。図書館・図書室という職場に対して、どんなことを考え、どんなふうに戸惑い、どんな情熱を秘めているのか。率直な胸の内を聞いてみた。

「たくさんのことを教えていただいています」

進行：それでは、まず自己紹介もかねて、所属と現在の業務内容を教えてください。

中塚：情報学研究科図書室の中塚です。いまは主に雑誌の担当ですが、カウンター・ILLなどもろもろですね。工学部等の中では桂図書館を準備するサブグループというのがありまして、そちらでも雑誌の担当（図書室ごとに購入しているタイトルを調整するためのリスト作成等）をやっています。



赤木：赤木です。所属は人文科学研究所の図書掛、漢字情報研究センターの図書整理の担当です。8月からは現代中国書の遡及入力で、バイトが入力した新規書誌のチェックを主にやっています。中国の本は出版形態がよくわからなくて、非常に難しいです。掛長とか前任の方とかに、メールで質問したりしてます。合間を見て雑誌整理・ILLなどもやっています。センターの建物は国の登録有形文化財になっていて、

観光客がよく来てます。

高城：文学部整理掛の高城です。洋書目録の担当です。文学部では教室ごとに請求記号の体系が違いますが、10月からはその請求記号付与も一部担当することになりました。文学部では、古典籍も含めて、遡及入力が課題になっています。先輩たちはみなさん目録業務に詳しくていらして、たくさんのことを教えていただいています。

楠見：経済学部整理掛の楠見です。いまやっている仕事は和書目録で、主に新規受入の中国書と和書、あとは教官からの返却本などです。来年4月までに受入の仕事も覚えなないといけないことになっていて、和書の受入から慣れていって、洋書受入のほうへ移行していくという予定なんです。いまは洋書目録も少し手伝う機会があるのですが、洋書のほうの画面も見慣れておくという意味で、準備になっていると思います。私も、目録のことは主にまわりのみなさんに教わりながらやっています。あと、カウンターにはまったく出ていません。

筑木：法学部整理掛の筑木です。担当は洋書目録です。ほとんどが新規受入の図書ですが、ドイツ語とかフランス語とか、NCにヒットしないのが20%以上はあります。自分にとってはNCのヒット率は必ずしも高くないと思うのですが（笑）。僕もカウンターには出ていないです。

進行：カウンターに出てないと、学生に間違われたりしない？

楠見：私は多分間違われてると思います。場所によっては変な目で見られることもあるので、エプロンをして、職員ということをアピールするようになりました。

中塚：青いエプロンはやめたほうがいいですよ。生協に間違われる（笑）。

楠見：あと、古い返却本だと細かいほこりが積もってて、マスクをして作業することもあります。私はくしゃみが出るんで、鼻まで隠れるようなやつで。

赤木：僕も、配属直後の4月頃は咳がとまらなかったですね。書誌学者の林望先生は「本に触る者は早死にする」と言ってますね（笑）。

「本尽くしの人生です（笑）」

進行：では、図書館員になろうと思った動機・きっかけを教えてください。もしあれば、特に大学図書館・京都大学を選んだ理由もお願いします。

中塚：困りましたね、ないんですけど（笑）。先輩の紹介で、公共図書館でアルバイトしてたんですね。それをあわせれば、もう7年くらいずっと図書館で働いてますので、動機とかそういう問題じゃなくなってると思いますか、図書館職員として働いたのしさを日々経験してしまって、もうほかの職種を選ぶ理由が見当らなかったですね。もちろん、書庫に自由に入れるというようなメリットは感じてましたし、京大の蔵書量は魅力でした。

赤木：私は附属図書館のカウンターでアルバイトをしていましたから。自分の知識を活かせる場であるということもありましたし、本が好きですし。

進行：図書館でアルバイトや働いていた経験のある人は、どのくらいいますか？

高城：多分、全員経験あるはずですよ。

筑木：僕も大学の図書館でアルバイトをしました。もともと学術・研究に携わる仕事をしたかったんですけど、学生の時、論文を書くのに図書館を利用して、こういう学術情報と利用者とを結びつけるような仕事をやってみたいと思うようになりました。

中塚：素晴らしい。

進行：これ読んでる図書系の人たち、みんな喜ばはるね（笑）。

高城：模範解答ですね（笑）。

筑木：いや、ほんとですよ。

楠見：私は小さい頃から本が好きで、公共図書館のほかに書店のアルバイトもしてました、本尽くしの人生ですね（笑）。教員か、出来たら図書館員になれたらとは思ってたんですけど、倍率的に無理だよ、くらいに考えてたんです。でも、身近に真剣に図書館員を目指していた人がいて、その人が倍率のすごい公共図書館に現役で合格なさったんですね。それを見て、図書館員になるということが夢物語じゃないんやという感じがして、一念発起した、というのがきっかけかもしれないですね。館種は、公共と大学図書館って一長一短あると思うんですけど、学生のころから大学という環境に魅力は感じてて、ずっとこうだったらいいなと思ってましたし、公共図書館とかとちがって適度な異動がありそうなのも、自分に向いてる気がしました。

高城：私も図書館は好きだったので、桃山学院大学の司書講習を受けてはいたのですが、実際に就職できるとは思っていませんでした。でも、囑託として公共図書館で働いていたときに、同じ囑託の方で、種試験に合格し大学図書館に就職された方がいて、もしかしたら頑張って勉強すれば受かるかも、と思うようになりました。身近な人、って動機付けになりますよね。

「アルバイトのころと勝手がちがいますね」

進行：では、実際に仕事に就いてみての感想は、どうだったでしょうか。

高城：京大の職場環境はとても恵まれていると思います。素晴らしい先輩がたくさんいらっしゃるし、研修にも積極的に行かせていただけるし、講演・講習会・勉強会の案内もたくさん来ますし。何よりみなやる気のある人ばかりです。当然ながら自己研鑽が要求されていますし、

またそうするための環境が整っています。とても刺激的なところです。

筑木：僕は、カウンターでのアルバイトの経験はあったんですけど、目録という整理・管理系の仕事は初めてだったんで、こんなふうにやってたんや、とわかりました。NC登録だと、自分の仕事がすぐに全国に発信されてしまうから、ある意味怖い、責任重大だと思いますし、だからこそ逆に充実感もあります。

中塚：マイナスの感想も（笑）。ネットワーク関係の作業にずいぶん時間をとられるのは意外でした。緊急性の高い場合だと、手で端末の台数分ワクチンを注入しますし、そもそもセキュリティ管理に必要な情報を日常的に入手する作業は、どうしても勤務時間外になってしまいがちです。

赤木：特に不満はないんですけど。前任者の方が他大学へ行ってしまったこともあって、これまでどういうことがなされていたのか、いまいち把握できてないんです。情報のヨコのやりとりが円滑でないのも、気になります。アルバイトのころと勝手がちがいますね。

進行：京大で学生をしてたころと、職員として仕事に就いてからとで、変化は？

赤木：まったくないですね。気負わないようにしてます。

楠見：私はいまの職場や仕事内容が自分に合ってると思うんですけど、それだけに、あまりにもいまの仕事だけにのめりこむと、他のことは何もわからない状態のまま次のところへ異動することになってしまうのかな、という危機感があるんです。言い訳のできない勤続年数にならないうちに、いまのうちにちがうこともどんどん吸収しとかなないと、後々自分にドンツと返ってくるんじゃないかって。いまが居心地いいだけに、あとのこともきちんと考えとかなないといけないよ、と自分に言い聞かせてます。ちょっとですけど。

「新人用のオリエンテーションを」

進行：半年間仕事をしてみて、もっとこうしたらいい、こうすべきだというような提言はありますか。



筑木：先ほど赤木さんの言ってたように、タテ割りというか、自分の仕事の役割分担がきちりしていて、隣の掛や他の部局でどういう仕事をやっているのか、というのが判らないですね。それが判ると、自分の仕事をもっと合理的になったり、サービスがよくなったりするんじゃないかな、とも思います。それから新人として採用されたとき、いきなり 学部の 掛に配属されるとかではなくて、まず最初に、図書館が全体としてどういうシステムや体制をとっているのかとか、そういうことを教えてもらえるオリエンテーションをやってもらえたほうがやりやすかったと思います。

中塚：工学部等では、各図書室が集まって、桂図書館として統一した運営方針をつくっていくための議論を、図書職員間で重ねている状態にあります。ですが、そこで検討した結果を反映していけるような組織的枠組みがないんです。このルートをなんとかつakってゆかなければならないと思います。

赤木：具体的な話になりますが、なぜ請求記号を統一しないんだろう、と思います。利用者の立場からも職員側からも、部局によって請求

記号がちがうというのは扱いづらいと、切実に思います。どれに統一するかを選ぶのは難しいけど、なんらかの統一されたものは前提として欲しい。

高城：私は、教室によって違う分類、というのは見ていて興味が沸きます。だって研究しやすいように分類されているわけですから。全学の全分野の図書を統一するのは、ちょっと無理だと思います。もし統一したいなら、請求記号のどこかに専門の分類が必要でしょうね。

楠見：でも利用者の検索の仕方が、いまはもうピンポイントになってきてるから、分類の意味ってどんどん低くなってきてるんじゃないかな、と思ってて。特に細分類は。極端な話、受入順とか、10段階の区分のような曖昧なカテゴリーサイズでも、利用者は利用できる状況になってきてるんじゃないかなとも思うんですけどね。うちは閉架だし、入庫するとしても、検索してから入庫するから。開架にしているとそれなりに意味はあると思いますけど。あと、独自分類もその図書職員にとって便利だとされてるのかもしれないけど、その職員が10年20年居られたような時代はいいとして、いまみたいに異動が頻繁だと、職員のほうも把握できないでしょう？

赤木：職員が変わることで、本当に統一的に分類できてるのか、とか。

楠見：その専門分野を知らない職員が、独自分類を正しく付与できてるのかっていうのも、疑問。

筑木：広い範囲でとればいいんじゃないかな、と思う。民法なら民法で。そこにある、っていうことがわかればいいんじゃないかなって。

赤木：遡及入力していると、同じ本なのに全然ちがう分類が付いてるのが、ものすごく多いのに気付く。

高城：歴史のあるところほど大変。

楠見：母体が大きすぎて無理、かな。

筑木：昔の分も遡及して統一し出したら、終わらないですよ。

楠見：遡及入力と並行して早めにやったほうがいいかもしれないけど、整わないうちにやるのも・・・。

「新規書誌作成はやりがいありそう」

進行：ちょっと話題を変えて、もし自分がいまの部署に配属されてなかったとして、他のメンバーのどの部署に興味を持ちますか？（注：念のため、全員が「いまの部署が一番いい」と発言しています）



高城：新しい図書館が出来る過程に興味があるので、工学部。

中塚：目録はできるだけ早いうちに習得しなきゃいけないと考えてますので、いまのうちにロシア語とフランス語を勉強しておいて、多種多様な言語の多いという文学部へ。

赤木：新規書誌作成が多いという、筑木くんのところ。大変そうだけど、やりがいもありそう。

楠見：漢字情報研究センターで漢籍に埋もれてみたい。文学部もいいけど多種多様な言語は・・・（笑）

筑木：どこも一度は経験してみたいですけど、新しい図書館を作り始めるという工学部。

「いろいろなところをまわりたい」

進行：では最後のシメとして、今後の抱負を、無理のない範囲でどうぞ。



赤木：いまの職場が漢籍を扱っているところなので、その専門知識を身につけていきたいと思っています。

中塚：文献収集講座というのを工学部等の図書室でやるんですよ。今日も立て看板作りまし、テキストやホームページも作ります。図書職員でデータベースの使い方とかを説明するので、利用者教育関連のスキルを磨いてゆきたいですね。

筑木：いろいろなところをまわりたいですけど、いまやっと目録や受入のような管理部門の仕事を覚えはじめたところなんで、しばらくはその勉強を続けていきたいと思っています。

楠見：最終的には洋書目録も覚えたいといけ

ないんで、いまのうちにもうちょっと語学をがんばらないと、と思います。

高城：語学とコンピュータ関係の勉強は必須ですが、いろんなところを異動して全体を把握したいです。京大の図書館は将来どうなっていくのか、常に関心を持って自分なりに考えていきたいので。

赤木俊介 / 人文科学研究所図書掛

楠見牧子 / 経済学部整理掛

高城雅恵 / 文学部整理掛

筑木一郎 / 法学部整理掛

中塚弘人 / 工学部図書掛情報学研究科

(司会進行: 江上敏哲 / 附属図書館電子情報掛)

#### 附属図書館について思うこと

文学部研修員 柴田芳成

私の附属図書館の利用の仕方として、学部生の頃は机で本を広げることもありましたが、最近は、書庫内で図書や雑誌を探す、あるいは文献複写の依頼をするという用件が大半です。その程度の利用でしかありませんが、以下に、感想を書きつけます。

・大学図書館の蔵書 試みに、OPACで「ハリー・ポッター」を検索したところ、既刊の4作品ともヒットし、いずれも「貸出中」(調査1件あり)で、予約が入っているものもありました。また、こちらは附属ではなく総合人間学部図書館ですが、村上春樹『海辺のカフカ』に予約が11件入っているという検索結果が出ました(平成14年12月17日)。各作品とも1冊だけの所蔵のようなので、近頃しばしば報じられる「図書館の大量購入と著作権」といった問題はなさそうですが、それ以前に大学図書館の蔵書としていかなるものかと思っています。書店や一般図書館で容易に手にすることができる図書をいくつも購入するより、少しずつでも専門書を揃える方が大学図書館にふさわしいのではないで

しょうか。私には人文系の本のことしかわかりませんが、最近の研究書については、他大学と比較して、京大は必ずしも充実しているとはいえないように思います。また、京大の蔵書として、例えば、宮部みゆきや京極夏彦はどうだかなと思います(どちらも総人に所蔵あり)が、太宰治や三島由紀夫ならば抵抗ありません。採否にあたってどこで線引きをするかは難しい問題だと思いますし、利用者からの購入希望があれば、それに答える役割というものもあるかとは思いますが、採否に関わっておられる司書の方々の見識に期待します。

・片田文庫 二階の開架にきれいに並んでいますが、どのくらい利用されているのでしょうか。私の場合、以前の方が使い勝手のよいものでしたが、片田文庫と以前の開架図書との利用頻度の比較などはされているのでしょうか。とはいえ、以前のことを知らない学部生にとっては、片田文庫がずらっとあることの方が普通なのですね。

・図書館内の飲食 これは専ら利用者の側の問題になりますが、ドリンクコーナーの設けられた今でも、机の上にペットボトルを置いているのを見かけます。公の場所なので、そのくらいの約束事は守りなさい。

(しばた よしなり)